産経新聞　朝刊　和歌山版　2023年5月14日

くじら日記

太地町立博物館から

串本に座礁イルカ

野生の命も守りたい

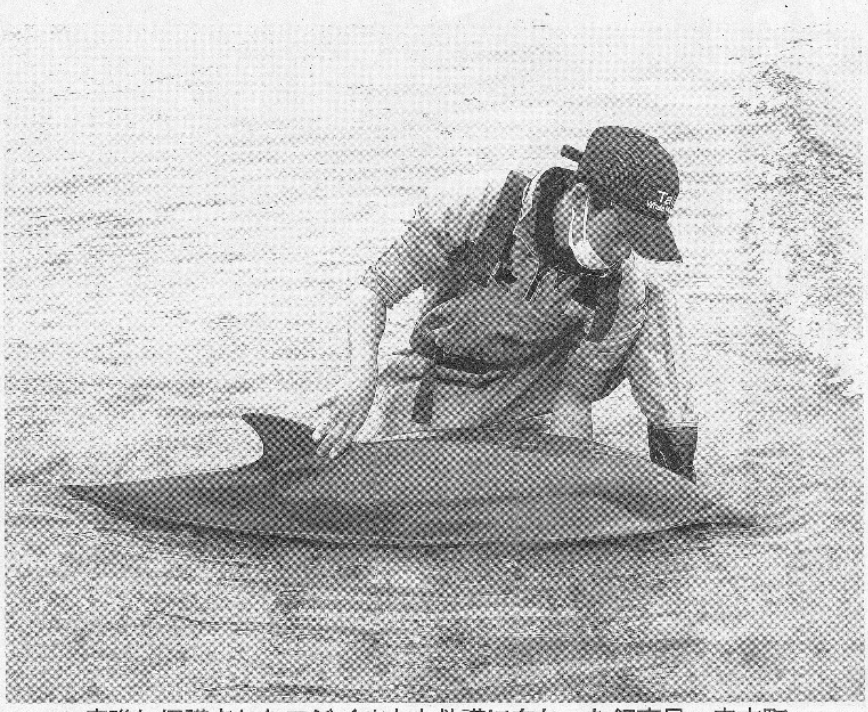
2023（令和5）年3月25日午前、串本町役場から電話がかかってきました。

「（串本町の）橋杭海水浴場に2頭のイルカが打ち上がっています。1頭は息をしていませんが、別の1頭は生きているようです」

一生を水中で過ごすイルカにとって、海岸に乗り上げてしまうことは致命的です。そのまま見過ごせば、生存する1頭もまもなく命を落とすでしょう。連絡を受けた筆者ら飼育員は、救護と調査の準備を済ませ、車を走らせました。

正午頃、現場に到着し、串本町職員と合流しました。イルカは浜辺に横たわったまま波に打たれていました。頭の上にあり呼吸をつかさどる鼻孔が断続的に海水と接触し、いつ溺れてもおかしくない状況でした。急いでイルカの体を起こしてやり、状態をみました。特徴的な黒い筋模様からすぐにスジイルカだとわかりました。

大人では2・5メートルに達する種類ですが、このイルカは1・5メートルほどです。1歳から2歳程度に見えました。吐いた息は海水を誤嚥したのかしけており、体やひれには擦過傷がみられます。動くこともほとんどありません。



座礁し保護されたスジイルカと救護に向かった飼育員＝串本町

水産庁の「鯨類座礁対処マニュアル」では、座礁した鯨類について、健康良好な場合は「そのまま放流する」ことが原則とされています。しかし、この子供のイルカを海に戻しても、波に押し戻され、さらに体力を消耗させてしまうことは明白でした。

マニュアルには、回復の見込みや収容施設等の条件がそろっている場合、「保護し治療する」ことも示されています。今回のケースでは、こちらの対処のほうがよさそうです。串本町職員の力を借り、イルカを担架で持ち上げ、水槽を積んだトラックに運びました。

くじらの博物館に到着後、検査を開始しました。血液検査からは目立った所見は得られませんでしたが、体温測定から低体温症であることがわかりました。スジイルカは神経質でショック状態に陥りやすく、座礁前後のストレスが原因と考えました。予想以上に衰弱していることがわかり、プールに放すことは諦め、水槽の中で治療を続けました。水分補給のための血管からの輸液、栄養補給のための流動食、そして医療措置を施し、昼夜ずっと見守りました。しかし2日後、力及ばず、イルカは息を引き取りました。

くじらの博物館は、国内最多である9種の鯨類を飼育しており、飼育員は、その命を守ることに向かい合っています。

今回は残念ながら息を引き取りましたが、日々の研鑽から得られた知識と技術によって、野生イルカの命を守ることにも役立ちたいと思うのです。

（太地町立くじらの博物館館長　稲森大樹）

◇

今回は第2日曜日ですが、原則、第1日曜日に掲載します。